

# 学生の学校給食支援ボランティア活動によるサービス・ラーニング

## A Case Report of In-service Learning: A School Lunch Support Volunteer Program at Elementary Schools

(2008年3月31日受理)

高 早苗 北島 葉子 村上 淳 林 英生  
Sanae Ko Yoko Kitajima Jun Murakami Hideo Hayashi

Key words : 学校給食, 食教育, ボランティア, サービス・ラーニング, 管理栄養士養成課程

### 抄 録

現代生活学部は、管理栄養士養成課程に在籍する学生の専門性を生かした地域貢献を目的として、近隣小学校における学校給食支援ボランティア活動を平成17年4月に開始した。19年度までの3年間で活動日数は144日、参加学生数(3,4年次生)は183人である。この活動の特色は、給食時間に特化した活動であること、派遣先(小学校)へのサービスだけでなく、学生の専門分野の学習の場(サービス・ラーニング)<sup>注(3),(4)</sup>ともなっていることである。今回、これまでの実績をまとめ、評価した結果、所期の目的はほぼ達成できたものと思われた。そこで、サービス・ラーニングとしての一層の充実にむけて検討し、今後は①学生の自主活動を強化、②事前・事後学習を充実、③支援組織を強化、④活動時間数を確保することにより、より一層効果的なボランティア活動が可能となることを示した。

### I はじめに(背景, 経緯など)

中国学園大学は、平成14年4月に短期大学の栄養士課程を改組して、管理栄養士養成課程のみの単科大学として発足した。おりしも大学は、研究教育機関としての活動にとどまらず、広く門戸を開放して地域と連携し、地域の社会的課題の解決に貢献することが強く求められるようになった時期であった<sup>注(1),(2)</sup>。本学では当初から学生の自主性を重んじ、自主学習を支援するようなカリキュラムを編成し実行してきたが、1期生が最終学年に達した平成17年度にカリキュラムの再検討を行い、学生教育も社会教育と密接に連携すべきであるとの基本的な考え方に則り、学生ボランティア活動を開始し、今日まで奨励してきた。活動内容として、本学学生の専門性、すなわち食や栄養にかかわる知識および技術を生かすことを第一に考え、現代社会は子どもたちの食の問題に直面していること、その問題解決の方策として食育の重要

性が認識され、食育の場としての給食時間の有効性が説かれている<sup>1)</sup>ことを踏まえ、近隣小学校に於ける「学校給食支援ボランティア」活動を立案し、試行してきた。この活動形態は、単なるボランティア活動(コミュニティ・サービス)ではなく、活動を通して学習する(学生の教育に重点を置く)サービス・ラーニング(SL)<sup>注(3),(4)</sup>に極めて近いが、現在のところ単位化はしていない。今後この活動を授業時間の一部として単位を認める方向で検討することも視野にいれ、これまでの実績をまとめ、評価し、報告書としてまとめることとした。

### II 小学校に於ける食育の必要性和学校給食の役割

学童期は、心身の発育・発達時期であり、成長および活動のために十分な栄養を必要とする時期である。しかし学童期の食事に求められるのは、健康や成長のための栄養だけではない。生活に喜びと潤いを与え、豊かな感

性を育て、社会性を養う、いわゆる全人教育の場である。また、学童期は、食べ物の選び方、食べ方、共食のマナーなどのよい食習慣を身につけ、肥満、生活習慣病を予防するための方法も学び身につけるのに最も適した時期でもある。ところが、肥満児童数はここ20年間で1.4倍（2年生3.8%→5.5%、6年生7.4%→10.2%）に増加し、成人の生活習慣病と思われていた高血圧は、ここ4年間で一気に7倍（3,4年男0.5%→3.5%）にまで増加している<sup>2)3)</sup>。この背景には、夜型生活、室内遊びなどによる身体活動の不足、朝食欠食、食の簡便化、個食、孤食などの不適切な食生活がある<sup>4)</sup>。児童が望ましい食習慣と自己管理能力を身に付け、この状況に対応して自らの健康を保持増進していくことができる能力を培っていくためには、より効果的な食に関する教育すなわち「食育」が必要である。学校給食は、給食を「生きた教材」として利用し、「食事をする」という活動を通しての具体的な教育が可能であり、児童に望ましい食習慣と食に関する実践力を身に付けさせる絶好の手段である。また、準備や後片付けなどの共同作業を通して責任感や連帯感を養い、好ましい食事マナーを身につけるとともに、学校給食に携わる人たちへの感謝の気持ちなど豊かな心をはぐくみ、好ましい人間関係を育てることができる。さらに、学校給食に地場産物を活用し、地域の郷土食や行事食を提供することを通じ、地域の文化や伝統に対する理解と関心を深めることもできるなど高い食教育効果が期待できる。

### Ⅲ 学校給食支援ボランティア実施のための支援体制と準備

#### 1. 支援体制

##### ① 教員組織

3名の教員が、担当者として学部内の時間割等の調整、年度初めの小学校側との日程調整、準備授業の運営などに当たっている。

##### ② 活動時間の確保

活動する曜日を定めて、2,3限の授業時間(11:00～14:40)に必修科目などの授業は組まないように配慮し、学生が参加しやすい環境を整えている。しかし、2,3限2コマを空けているため、ボランティアの担

当日でない3年次生の、この時間の有効活用が課題となった。20年度は、臨地実習や就職活動に必要なキャリア教育をこの時間に組み込み、与えられた課題（漢字の書き取り、作文、計算問題、マナー講座など）を自主的に学習することとし、有効に活用する方策をとった。このように、時間割に組み込んでいるが、現在のところ、単位の認定は行っていない。

##### ③ 教育実習事前学習の機会の提供

栄養教諭資格の取得を目指す学生の、教育実習事前学習の場としても活用している。

##### ④ その他

学生が自由に利用できる自転車20台を教員有志の寄付により配備し、移動の負担軽減策を講じている。

## 2. 準備

### ① ボランティア活動の公的な承認と登録

岡山市教育委員会は、一般市民や学生がボランティアとして幼・小・中・高の授業や行事その他学校運営に関わる事柄について「学校支援ボランティア」制度を設けている。本学の給食支援ボランティアもこれに加入し、活動開始前に市教委主催のオリエンテーションに参加し、ボランティア登録をしている（自動的にボランティア保険に加入）。

### ② 活動の準備・事前学習

- ・活動内容の説明と先輩の体験談を聞く会の開催。
- ・実施直前の、具体的な説明・諸注意・打ち合わせを行う会の開催。
- ・毎月の献立表を印刷し、担当日の予習用資料として全員に配布。

## 3. 学生の自主活動体制

小学校別に学生を分け、活動曜日別に班を構成、各小学校にリーダーを、班ごとに班長を設け、自主的な運営に当たらせている。

## 4. 小学校の受け入れ体制

いずれの小学校も教頭が窓口となり、学校内での実施運営の指揮に当たっている。

## IV 実施方法

給食時間に特化した活動として、「給食時支援」と給食時間内に行う「給食時食教育」の2つの方法を試みた。1回の活動時間は、移動時間を含め約3時間（11：30～14：30）である。全活動終了後には報告書を提出させている。内容は、毎回の記録（活動内容、気づき、感想・反省と今後の課題）及び全過程終了後のまとめである。

### 1. 給食時支援

近隣の小学校（岡山市立R小学校、K小学校および19年度のみI小学校）において給食時間に、給食の運搬、配膳、食べ方のマナー（礼儀作法、箸・食器の持ち方など）、後片付けなどについて、低学年児童の行動を観察し、適宜援助、支援、アドバイスを与える。これにより児童とのコミュニケーションを図り、楽しい食事時間となるように担任に協力して実施した。

### 2. 給食時間の食教育

19年度に、I小学校の要望により、学校栄養職員だけでは十分に行えない給食時間の食に関する教育を定期的に行う活動を4年次生7名が参加して実施した。食教育時間は5分程度、実施する学年・クラスは、あらかじめ学校から指定されたため、食教育に連続性はなく、単発的な教育である。

#### ① 事前学習

参加学生全員が、3年次後期に管理栄養士養成課程の臨地実習とその事前事後学習をすでに体験してい

た。また、7名中3名は小学校での1週間の臨地実習経験があり、その内1名は、栄養教諭1種免許状取得科目を履修していた。このため本来活動前の事前学習として取り上げるべき、学外での活動に必要な基本的なマナー、人権教育、児童及び担任教諭への接し方、小学校における給食の状況の把握、食に関する教育の技術などについては、一通りの学習が終了しているものとしてスタートとした。

#### ② 支援体制

学内では、専任教員1名が卒業研究指導者として指導助言し、小学校においては、主に給食主任の教員が連絡、指導助言にあたった。

## V 結果（実施内容の記述）

### 1. 活動日数と参加学生数

#### 1) 給食時支援

平成17年度から19年度までの活動実績を表1に示す。3年間の活動日数の合計は144日、参加学生総数は183人である。

17年度前期及び18年度は4年次生有志のみの活動であったが、19年度からは、3年次生全員に参加を促した。小学校からは年間を通しての頻回の活動を要望されているが、大学のカリキュラムが過密な管理栄養士課程においては、現状が時間的な限界で、要望に応えることができていない。

#### 2) 給食時間の食教育

表1 平成17～19年度学校給食支援ボランティア活動実績

	平成17年度前期	平成17年度後期	平成18年度前期	平成19年度前期
学 校 数	2校* <sup>1</sup>	1校* <sup>2</sup>	1校* <sup>2</sup>	3校* <sup>3</sup>
実 施 期 間	4/14～7/12	11/6～12/20	4/21～7/25	4/11～7/23
実 施 曜 日	月・木・金曜日	火・金曜日	月・火・金曜日	月・水曜日
担 当 学 年	2	1	1, 2	1～6
担 当 ク ラ ス 数	9	5	8	20
1回当たり参加学生数	9	5	8	28
実 施 週 数	12	7	11, 12	11, 12
参 加 学 生 の 学 年	4	3, 4	4	3, 4
参 加 学 生 数 合 計	28	25	31	99

\*<sup>1</sup>岡山市立R小学校、K小学校

\*<sup>2</sup>岡山市立R小学校

\*<sup>3</sup>岡山市立R小学校、K小学校、I小学校

I 小学校において7人の参加学生が、1～6年生の各クラスで、計28回の食教育を行った。

## 2. 具体的な実施内容

### 1) 給食時支援

低学年の各クラスへ学生1～2名が入り、担任教諭と相談しながら実施した。

#### 実施内容

- ① 給食の運搬や分配の支援
- ② 給食を共にしながらの個別アドバイス（食品や料理の説明、好き嫌い、食べ残し、箸の使い方などの食事マナーなど）
- ③ 後片付けの支援
- ④ その他 掃除時間や昼休みも時間内は残り、子どもたちと交流した。

### 2) 給食時の食育授業

実施状況を表2に示す。給食時間は、児童に集中し

表2 給食時食教育のテーマおよび使用媒体

月	学年	テーマ	使用媒体
5	1年	野菜を知ろう	実物の野菜
	5年	ちりめんじゃこのヒミツ 大豆の変身	ペープサート フードモデル イラストパネル
6	2年	ビビンバについて知ろう カミカミ運動はこんなにステキ!	イラストパネル イラストパネル
	6年	世界各国の料理を知ろう	料理の写真 世界地図
		お酢のパワーを知ろう マナガツオって何? カルシウムと骨	イラストパネル 写真 パネル ペープサート パネル
7	3年	ゴーヤのパワー! 食物繊維の旅	実物 ペープサート ペープサート イラストパネル
	4年	野菜クイズ 行事食 たちうおクイズ	写真 写真 イラストパネル イラストパネル (実物大)
9	1年	食べ物クイズ	実物 イラスト
	2年	ヨーグルトのおはなし 野菜クイズ 行事食	イラストパネル 写真 写真 イラストパネル

て授業を聞くように教育することが難しい時間帯であり、なおかつ5分程度の短時間で専門的内容を教育するというかなり高度な能力を要求される活動であった。このため、参加学生全員が卒業研究のテーマとして取り組むこととし、サービス・ラーニングの要素がいつそう強い活動となった。活動終了後は、体験をまとめ、卒業研究報告会(平成19年12月19日)で発表し、論文は「平成19年度卒業研究」<sup>5)</sup>に収載した。以下①～④は、学生の記述である。

#### ① 食教育テーマの設定と準備

毎月の献立表から、食教育当日の食材または料理の中で、教材として適しているものをピックアップしてテーマを設定し、指導計画を立てた(表2)。実施日の2週間前頃から全員が協力して媒体作成を始め、食教育担当学生は実施日の2、3日前に、模擬授業を他のメンバーの前で行い改善点を検討した。小学校での食教育後、児童の反応、教育方法、媒体の適切性などについてメンバーで話し合い、その結果を次に生かすよう心がけた。次に食教育が比較的うまくいった例と、準備や工夫が不十分だった例を示す。

#### ② 実施例

##### a. ゴーヤのパワー(3年生)

###### 献立 ゴーヤチャンプルー

苦味が強く、児童に好まれないゴーヤが、栄養価が高く、健康によい食品であることを知らせ、頑張っ食べるよう促すことを目的とした。理解を深めるために実物を持って行って見たり触ったりさせ、説明には“ゴーヤマン”を登場させて関心を引くよう工夫した。その結果、教育前には、分配されていたゴーヤチャンプルーの量を減らそうとする児童が多かったが、教育後には残す児童はいなくなり、おかわりする児童が増えた。「思っていたより苦くなくて美味しかった」「ゴーヤのことが分かった」「ワタが苦いことが分かった」などの意見を聞くことができ、食教育の効果が目に見えてよく分かる例となった。

##### b. 野菜クイズ(2・4年生)

###### 献立 フレンチサラダ(2年生)

初めて取り組んだ事例である。野菜は、実になる前にはそれぞれ美しい花を咲かせることを知らせ、苦手意識の強い野菜を身近なものに感じることを目的とし

た。はじめにニンジンやキュウリなどの花の写真を見せて、何の野菜の花か質問したが、答えはなかなか出てこなかった。ヒントを出すとだんだん分かるが、普段身近に畑がなく、花を見たことがない児童が多く難しかったようだ。この教育では、花から実がある程度判断できるとの思い込みがあった点が第一の問題である。また、媒体は写真だけで、興味をひきつける工夫が不十分だったと反省した。いずれにしても2年生という学年への理解が不十分であったことが大きな反省材料となった。

### ③ 食教育の考察から得られた教育の要点

教育後のディスカッションから得られた教育の要点は次の11項目であり、大きくは「児童の興味関心を引きつける方法」と「学年別の対応」に分けられた。

#### a. 児童の興味・関心を引き付ける方法

- ・はじめに、前回行った教育内容を確認するための復習を行うことは、短時間で集中させる効果がある。
- ・一方的な説明でなく、質問に答えたり意見を発表させる参加型とする。
- ・声の大きさ、話す速さに注意をし、児童が理解しているかを質問などで確認しながら進める。
- ・食品は実物を見せたり触れさせると印象が強く残る。
- ・教室のサイズ、机の配置なども把握しておき、板書や媒体がよく見えるよう配慮する。

#### b. 学年別の対応

- ・各教科で学んでいる内容を把握し、学んでいることと関連づけた教育を行う。
- ・学年で学んでいる漢字を把握し、適切に使用する。
- ・1年生から実施した教育テーマのリストを作り、重複する場合は、内容に発展性を持たせる。
- ・低学年では独自のキャラクターを使い、物語のように話すと理解しやすく興味を持つ。媒体はペーパーサートなどの動きのあるものがひきつける効果が高い。
- ・学年が上がるにつれ、テレビなどで仕入れた誤った知識による質問や、大人顔負けの高度な質問もできる。想定質問をしっかりと考え、十分な準備をして臨む必要がある。
- ・学年が上がると児童間の知識差が大きくなる。クイ

ズ形式にする場合も、段階的に難易度を上げるような質問を投げかけ、多くの児童が参加できる工夫が必要である。

### ④ 考 察

今回の食教育活動を通して、適切な食教育を行うためのベースとなるもっとも重要なことは、担任をはじめとした教諭とのコミュニケーションであると感じた。クラスによって担任教諭の給食に対する考え方や方針が異なるし、児童は学年と共に大きく変化するので、日々児童と接している教諭との緊密なコミュニケーションによる児童への理解が不可欠である。

## VI 活動の効果と評価

### 1. 期待される効果

これまでに報告した学校給食支援ボランティア活動は、次のような効果を期待して実施した。

#### 1) 地域・小学校への貢献

小学校が直面している食の問題に対し、専門性を生かして児童の給食と食育を支援する。

#### 2) 学生への教育効果

- ① 社会性を養い、多様な人々とのかかわりの中でコミュニケーション能力を高める。人の役に立つ体験を通して、自信と生きる意欲を高める。
- ② 日々学習している専門知識、技術を実際に子どもたちと触れあうなかで実践的に試したり、深めることのできる機会となる。
- ③ 食べ方、マナー、好き嫌いなどの実態観察から、児童の食に関する現状と問題点の把握や発達段階に応じた食生活についての理解を深め、食に関する教育の実際について学ぶことができる。
- ④ 専門性を生かした活動を通して、学習への意欲と自信を深め、専門家になることへの動機付けとなる。

### 2. 評 価

上記目的の達成評価は、参加学生、小学校及び大学サイドから多角的になされるべきである。今回は数値化できるような客観的評価は行っていないが、学生が提出した報告書の記述による評価等を示す。

#### 1) 学生による評価および問題点

活動に参加した体験を「2005年度岡山市学校支援ボランティア大学生シンポジウム」で発表した渡部<sup>6)</sup>は、この活動が児童の食の現状を知る学びの場であり、食に関する教育を行う実践の場でもあることを、野菜嫌いの児童が、声かけで食べるようになった例や、家庭で牛乳を飲むことを勧めると、翌週、毎日飲んでいると報告してきた例をあげて、自分たちの一言が、時には児童の食行動変容のきっかけとなることに驚きと喜びを感じたことを報告した。また、遊び食べ、犬食いなどの食行動上の問題を目の当たりにして、家庭との連携による食育推進の必要性を痛感したと述べ、この体験が今後の学習にも、管理栄養士として就職してからも大きく役立つと結んでいる。また、19年度に参加した3年次生は次のように述べている。

- ① 分からないことばかりで最初は不安だったが、回を重ねるごとに楽しく指導ができ、とても貴重な経験となった。
- ② 回を重ねるにつれ、児童と親しくなり、手伝いもスムーズに行うことができた。
- ③ 先生の責任の重さ、難しさ、食育の大切さが実感できた。
- ④ 栄養教諭を本気で目指したいと思うようになった。
- ⑤ 今回の経験は臨地実習に絶対役立つと思う。
- ⑥ 学校給食がどのようなものか分かったし、コミュニケーションの大切さも分かった。
- ⑦ 児童が嫌いなものを食べてくれるようなアプローチができるように、もっと努力したい。
- ⑧ 声をかけると食べようと努力してくれたので、声かけは大切だと思った。楽しくよい体験になった。

以上のような学生の評価から、当初期待していた教育的効果（VI-1-2）学生への教育効果）は、ほぼ達成できているものと思われた。一方問題点としては、「やっとなれた頃に終わるので残念」、「後期も継続したい」などの意見があった。3年次生の場合、1人あたりの活動回数は約4回（約12時間）と少なく、学生が満足する時間数が確保できていないことが明らかとなった。また、難しかったこと、迷ったこととして、「担任教諭とのコミュニケーション」、「叱ってよいの

か」、「手助けすることと自主性を尊重することの兼ね合い」、「アドバイスしたいが、給食時間が短くしづらい」などがあった。4年次生は、すでに臨地実習を経験しているため、比較的スムーズに児童や担任教諭と打ち解け、活動できるようであるが、初めての体験となる3年次生へのより充実した事前学習の必要性が示された。

### 3. 小学校側の評価

岡山市は、小学校1年生の4月から10月の間、各クラスに担任を補佐するグッドスタート制度による担任の補助を1名配置する措置を講じている。それでも、学校現場では、給食時には、運搬や配膳に時間がかかり、食べる時間が十分確保できず、2年生でも給食の準備には手間取ることが問題となっていた。そのため、給食時の支援や食事を共にしながらの食育は有意義なボランティア活動であると評価された。初年度終了時には、学生は大変まじめに熱心に取り組み、次年度もぜひ継続をとの要請を受けた。その後も、これまでの3年間に事故やトラブルは1件もなく、毎年感謝され継続するよう要請されていることから、小学校においてもこの支援活動は有意義な成果をあげている。

### 4. 大学側の評価・問題点

初年度終了時点で、学部内において、社会的な訓練になり学生により効果を与えていると総括し、次の年度以降の継続に繋げた。また、17、18年度の活動実績から、3年次生の全員参加についても学部内の合意が得られ、19年度から実施している。

この活動の最大の問題点は、容易に派遣先を確保できないことである。小学校の給食時間という限定された時間帯の活動であることや、参加学生は、授業の合間に出かけるため、徒歩または自転車で行き来できる近隣の限られた小学校での活動となることなどの制約が伴うためである。

### 5. 社会的評価

17年度及び18年度の「岡山市学校支援ボランティア大学生シンポジウム」における本学学生の体験発表<sup>6)</sup>は、参加していた小学校教諭や報道関係者に注目され、わが校にも来て欲しいといった依頼があったり、新聞数社に大きく取り上げられたことから、この活動の主旨や方向性は、社会的にも十分評価されるものである。掲載新聞

と掲載月日は次のとおりである。

- ・「学校支援ボランティアでシンポ 活動者ら事例報告」山陽新聞 2006年1月15日
- ・「学校支援ボランティア 大学生ら成果報告」岡山日日新聞 2006年1月16日
- ・「幼小中で学校支援ボランティア 一言で変わる子供の意識」朝日新聞2006年1月19日
- ・「学校支援ボランティア体験 子らとの触れ合い喜び・大切さ訴え」朝日新聞2007年1月14日

## 今後の課題

これまでに述べたように、本学部の学校給食支援ボランティアは、派遣先である小学校、参加学生の双方から高い評価を受けた。今後の目標は、サービス・ラーニングの科目として単位化することをめざすことである。その実現のために、解決すべき具体的な課題は次の4項目である。

### 1. 学生の自主的活動を強化

ボランティア活動は、学生の自主・自発的な活動を教職員による支援組織がサポートするのが本来の姿であるが、現状は、教員が敷いたルール上での活動となっている。来年度は、学生による企画・運営を教職員が支援するよう試行する。

### 2. 事前・事後学習の充実

臨地実習などの外部との接触が未経験な3年次生に対しては、児童や教諭との接し方など、より具体的な事前指導が必要である。この指導には、経験者である4年次生の活用が有効である。学生の自主活動の一環として、新年度のオリエンテーション期間の実施を具体化する。また、事後のまとめをレポートとして提出する、体験を発表するなどの機会を設けることも検討したい。

### 3. 支援組織の強化

大学におけるボランティア推進システムの理想の姿は、①ボランティアセンターの設置、②ボランティアコーディネータ(専門職)の配置、③学内運営協議会の組織化、④運営システム作りへの地域NPOや学生の参画である<sup>7)</sup>。サービス・ラーニングの本格導入に向けては、ボランティアコーディネータ有資格者など専門的な指導を行える人材を擁するボランティアセンターまたはそれに準ずる組

織の設置が必要である。

### 4. 活動時間数の確保

大学の授業がなく、小学校では授業を行っている9月を有効に活用することは、ひとつの解決策である。また、19年度からは、少人数ながら近隣のグループホームでの活動も開始し、よい評価を得て20年度も継続することになっている。高齢者施設での活動の拡充も検討する。

## 注

- 1 平成13年7月に「学校教育法」「社会教育法」の一部改正が行われ、新たに「ボランティアなどの社会奉仕体験活動」の推進が掲げられた。
- 2 文部科学省は、平成17年度に奉仕活動・体験活動の推進による豊かな心の育成と地域教育力の再生を施策目標として「地域ボランティア活動推進事業(地域教育力再生プラン)達成年度平成19年度」を立ち上げ、地域社会・大学・学校・企業の連携した事業の実施を促している。この中に示された大学生対象事業は、年間を通じて長期休業期間中におけるボランティア活動の実施及び「ボランティア休学制度」や「単位認定制度」を積極的に活用したボランティア活動の2点である。
- 3 サービス・ラーニング(SL Service-Learning)は、アメリカで生まれ1990年代後半に日本に入ってきた言葉で、適訳が見つからないままカタカナ表記されている。SLは、学生のボランティア活動をSLとして大学のカリキュラムに体系的かつ組織的に取り入れ、学生が非営利団体でのボランティア活動を通して社会活動に積極的に参加し、地域社会から学び社会に対する責任の一端を担うことができるようにすることを目的とする。佐々木正道：大学におけるサービス・ラーニングの最近の動向。大学と学生(2004-7) pp. 14-16.
- 4 学生たちの自発的な意志に基づいて、一定期間、社会奉仕活動(サービス活動)を体験することによって、それまで学校などで知識として学んできたことを実際のサービス体験に応用し、また実際の体験から生きた知識を学ぶ新しい教育プログラムである。(中略)実際のサービス活動を有意義に行い、そこから多くを学ぶために、事前の準備や心構えが必要であると同時に、

実際の体験を通じて学んだことを自分の知識に取込んで行く内省（リフレクション）の過程が組み込まれていることが教育プログラムとして大切なポイントである。（中略）「学んだことを体験に生かし、同時に体験から学び取るプロセスが積極的に取り込まれている」ことが明確なプログラムである。山本和：国際基督教大学「サービス・ラーニング」の取り組み。大学と学生(2004-7) pp. 33-37.

## 参 考 文 献

- 1) 内閣府：「食育白書」，社団法人時事画報社（2006）  
pp. 47-55.
- 2) 文部科学省：「平成19年度学校保健統計調査速報」
- 3) 日本学校保健会：「平成8年度児童生徒の健康状態  
サーベイランス事業報告書」
- 4) 戸谷誠之，藤田美明，伊藤節子：「健康・栄養科学シ  
リーズ応用栄養学」（2005）pp. 151-153
- 5) 石井美奈子，今村真未，大藪倫子，小倉由子，左  
子友愛，滝本祥子，横田佳子：学校給食支援ボラン  
ティアの活動を通して学んだこと。「平成19年度卒  
業研究」（中国学園現代生活学部人間栄養学科編）  
（2008）pp. 6-12.
- 6) 渡部望：「学校支援ボランティア活動における給食  
支援について」，中国学園広報誌 しらさぎ第34号  
（2006）pp. 19-20
- 7) 興梠 寛：「共生知の学びの世界へ～学生ボランテ  
ィア活動に関する最近の動向について～」 大学と学  
生(2004-7) pp. 7-13